

平成29年度タンチョウ保護増殖検討会

議事概要

1 開催日時および開催場所

日 時：平成29年8月7日（月）14：00～17：00

場 所：釧路地方合同庁舎5階 第1会議室

2 出席者一覧（敬称略）

<保護増殖検討委員>

正富 宏之	専修大学北海道短期大学 名誉教授
小川 巖	エコ・ネットワーク 代表
百瀬 邦和	NPO法人 タンチョウ保護研究グループ 理事長
松本 文雄	釧路市動物園 主幹
黒澤 信道	公益財団法人 日本野鳥の会 釧路支部長

<関係機関>

公益財団法人日本野鳥の会鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ、北海道環境生活部環境局生物多様性保全課、北海道十勝総合振興局保健環境部環境生活課、北海道釧路総合振興局保健環境部環境生活課、北海道根室振興局保健環境部環境生活課、北海道開発局開発監理部開発連携推進課、北海道森林管理局計画保全部、根釧東部森林管理署、根釧西部森林管理署、釧路市動物園、タンチョウコミュニティ、鶴居村教育委員会、鶴居村産業振興課、鶴居村タンチョウ愛護会、標茶町農林課、JAしべちやふれあい相談室、国際タンチョウネットワーク、NPO法人タンチョウ保護研究グループ、公益財団法人日本鳥類保護連盟釧路支部、日本生態系協会

<事務局>

北海道地方環境事務所、環境省釧路自然環境事務所、環境省釧路湿原自然保護官事務所

3 会議の概要

(1) 平成28年度タンチョウ保護増殖事業実施結果

- ① 「平成28年度タンチョウ保護増殖事業実施結果」について、資料1、概要資料1-1～1-11、資料2に基づき釧路市動物園から、資料3に基づき北海道開発局から、資料4に基づき北海道森林管理局から報告を行った。

<意見等>

- ・平成29年度の標識調査はほぼ前年度と同じ日数行い、24羽のヒナに標識を付けて放鳥することができた。今年は標識数は少なかったが、これまで標識の例がなかった3町村で標識ができたので、今後の結果が期待される。
- ・「タンチョウ生息地分散基礎調査業務」の対象地に静狩湿原が選ばれた経緯と選定理由を教えてください。
- ・「分散行動計画」に繁殖適地についての言及があるが、北海道南部は1箇所のみとなっており、選ぶというよりここに書いてあるところを全部やった。(日本生態系協会)
- ・
- ・「農業被害対策工検討業務」で、「慣れ」というのがどのように起きているのか、「慣れ」により対策の効果が低くなるという予想を持っているのかについて知らせてほしい。
- ・当初40cm間隔で垂らしたものが十分に固定できておらず、牛がいたずらをして間隔が広がる場所と狭くなる場所が出てきて、間隔が広がったところから侵入するのではないかと予測している。間隔を狭めた状態で固定できている状態を保つことで、比較的長期間に渡って侵入が防げるかどうかについて検証の余地があるのではないかと思う。(タンチョウコミュニティ)
- ・このことに加え、ネットは成功すれば物理的に侵入が防げるが、毎回開け閉めする手間や強度の問題など、運用上の課題があったので、これも検討の余地がある。(環境省)
- ・「越冬分布調査」について、平成27年度から28年度は特に十勝地方を中心に合計の調査箇所数が増えているが、どのように選定して増やしているのか。
- ・タンチョウ保護研究グループからの情報あるいは地域の市町村からの情報を得て箇所数を増やし、カウントした。事前調査という形で調べたというのが実態。(北海道)
- ・目撃情報収集等ともリンクしていけばありがたいと思う。

(2) 関係者・研究機関からの報告

「日本野鳥の会からの報告(冬期自然採食地調査)」について、公益財団法人日本野鳥の会 鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリより資料5に基づき報告。野鳥の会で鶴居村の中に、自然の餌をとれるような環境を整備する目的で15箇所設置をして利用状況調査を続けており、そのうち昨年度は9箇所にタイマーカメラを設置して調査をした。また足跡調査による冬季自然採食地利用状況、経路を確認。カメラに一部不調なところがあり、きちんとデータが取りきれないため、給餌量削減と自然採食地の利用状況について変化や関係があるのかは今回の結果からは判断できなかった。

「タンチョウ保護研究グループからの報告（総数調査等）」について、NPO法人タンチョウ保護研究グループより資料6に基づき報告。性差、寿命、繁殖、移動、家族関係、カウント調査の際の補正、給餌場の滞在状況等が標識調査で分かってくる。

<意見等>

- ・野鳥の会が手を加えなくても自然採食できる場所も当然あると思うが、それがどのくらいあるのか、それとも実は手を加えないとこういう場所はあまりないのか、感覚的なものでいいので教えてほしい。
- ・どのくらいあるのかというのは分かりかねる。ある程度ヤブを払って自然採食地を作っているが、明渠が整備された後に周囲でヤブが出てきたりすると今後使えなくなってくるところもあると思われることから、自然採食地は維持管理をしていかないとタンチョウがずっと使い続けることはできないという認識を持っている。（日本野鳥の会 鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ）
- ・資料6に「出生地と定着地」とあるが、これをレンジで表すとどうなるか。一般的にオスのほうがより遠くまで行くのではないかと思ったが、そうではないのか。
- ・オスは繁殖期になると自分の生まれたところまで戻ってくるが、メスはオス次第なので、メスのほうがより分散する。それで遺伝的多様性がある程度保たれている。レンジについてはオスでもメスと同じように数十キロ離れる場合もあり、そのことが、徐々に分散を広げている一つの要因である。
- ・1985年と2015年の「繁殖分布の変化」のような図が意外とない。こういう資料はオープンにしても良いのか。
- ・2015年の図は当法人のホームページの英語版には出ている。85年のほうはまだ出していないが、近々比較で出せるようにしたいと思っている。

(3) 平成29年度タンチョウ保護増殖事業実施計画

環境省より資料7及び別紙資料に基づき報告を行った。

、また、北海道開発局より資料8に基づき、釧路市動物園より資料9に基づき、今年度の事業計画について報告を行った。

<意見等>

- ・農業被害の調査について、平成28年度は14農家に聞き取りをしているが、これは被害に遭った農家の人、全部か。

- ・北海道が実施する道内の鳥獣被害の状況の取りまとめの結果や、目撃情報収集業務の対象としている関係行政機関・団体等に、タンチョウの生息状況や被害状況等の情報を確認し、その上で被害があるという情報を得たところを中心に聞き取りを行っている。したがって全部を含めているわけではないが、被害の報告があったところに聞いている。(環境省)
- ・調査を続けていく中で精度を上げてほしい。
- ・どういう状態になったときを「分散」とみなすのか、分散という最終的な形はどういう状態を考えているのか。
- ・最終的には道東だけではなくて全道に、あるいは全道を越えて本州のほうにまで分散していくことを想定し、地道ではあるが、それを目標に取り組んでいる。そのために生息適地や生息環境の整備等を並行して考えていかなければならないが、あくまでもタンチョウが自主的に自然分散していくことを理想としている。(環境省)
- ・「追い払い事業の実施」について、「26年度と同程度の予算を確保し、餌の購入量減による経費の余力分で追い払い事業を実施する」という表現を宣伝用や議会用に使ってよいのか。また、五大給餌場と合わせた給餌の仕方について、具体的な方策があったら教えてほしい。(鶴居村教育委員会)
- ・国としては引き続き事業を実施していくという意味でこういう表現をさせていただいた。五大給餌場からみた調整については、まずはデータを取ることで撒いた餌量を正確に把握することから始め、もし影響が集中するようなことが出てくれば対応をとっていく。(環境省)
- ・鶴見台での給餌の仕方も関係者と相談しながら進めていきたい。農業被害対策工もさらに関係者に広めることも検討してほしい。今後分散が進む中で農業被害を含め影響が出てくるのは間違いないと我々は認識している。それぞれ関係する自治体でも合わせて考えていかなければならないので、国として具体的な方策を検討する時期にきているのではないかと。(鶴居村教育委員会)
- ・目的は分散ということであり、5年間で5割の削減をどうしてもやるということではなく、こういう場で皆さんの意見や専門家の方の意見も聞きながら、変化が見えてくるとすればその対応について議論していきたい。5割削減した後のことも昨年少し議論しようとしたが、あまり意見が出なかった。次回あたりからは皆さんと今後の方策について議論し、状況を見ながら柔軟に対応していきたい。(環境省)
- ・「越冬地分散の進捗確認及び新規越冬地の現状把握」の中で「新たに越冬が確認された数か所について環境条件を調査する」という記述があるが、分散が始まるかもしれないというタイミングで調査するのでは遅い気がする。むしろ広がり始めたところに上手く定着するような取り組みなど、踏み込んだことを実施していかないと間に合わないのではないかと。

- ・調査については確かに遅れているところはあると思うが、現状としては、現在進行形で行っている最中で、今まさに新しいところへ出て行く個体もあるとすれば、そこをしっかりと把握するなど、できることを実施していくしかない。その中で考えていきたい。(環境省)
- ・道の給餌場においても同様の取組を調整するという話で、道の姿勢を伺いたい。
- ・道の給餌状況は、環境省で行っているものより少ないため、これをさらに減らすことは当面考えてない。緊急な状況への対応などは出てくるかもしれないが、今年度については28年度並みで進めていく考え。(北海道)
- ・越冬地の分散は技術的にも難しく、自然分散を当面は期待するということが良いと思うが、どうすれば本当に目指す分散ができるのか、今から少しずつそういう議論あるいは情報共有を進めておいたほうがいいので、そういう場での検討を期待したい。(タンチョウコミュニティ)
- ・この先に議論していく全体計画では、各事業団体は何を実施すべきか、それをいつまでにどのくらい実施して、どういうデータを取っていくかということを議論していきたいと考えている。また、分散行動計画を作ったときに地域がどう考えるのかという視点が抜けていたので、鶴居村、釧路市で議論されているものに我々も参加し、国としてタンチョウの保護増殖事業のあるべき姿に向かって国が果たす役割について積極的にご意見をいただき、予算化する行動に移していきたいと考えている。(環境省)
- ・「自然分散」とは自然にツルだけに任せておくという意味ではなく、ツルが分散しやすいように人間が手助けすることが含まれているが、ツルが分散していくための方法があまり論議されてない。ツルをどのようにして移動させるか、あるいは移動していくのにどういう方法がとれるかということをもう少し細かく詰めていく必要があると思う。
- ・分散のために必要なことについて、どのように取り組んでいくのかということがなかなか具体的にならなかった。そのためある意味最終的な選択肢として給餌量の削減に踏み切ったという経緯があったと思う。少し同時並行的にならざるを得ないところはあるが、今後の進め方について、どんな調査が必要なのか、何を把握すればいいのか、どう進めていくべきかということ、まとめていくことを議論していきたい。(環境省)
- ・越冬分布調査は、今やっている調査をもう少し、分散を把握できるようにしてほしい。
- ・どういうデータをとっていくべきかというのを整理したうえで議論していきたい。(環境省)
- ・行政やいろいろな団体のネットワークを使って、ツルがどこの農家にいるのかという情報がほしい。そういう情報があれば、数がきちんと掴め、分布の状態も掴める。
- ・今は、給餌場の最大数、冬の一番多い時期に何羽来るかというのがベースであると思うが、給餌場に来る時期が変わり、期間が短くなり、1日のうちの時間が短くなったということから、1日のうちに延べ何羽がどのくらいの時間給餌場を使っているかという視点も必要かと思う。

トータルとして、給餌場の利用時間が少なくなったということも分散の成果ということになると思う。